

総 括

森山 新

1. 時代の変化と日本語教育

今日の日本語教育の役割が、単に日本のことばを教えるというのではあまりに不十分で、日本人、文化、社会などを含めた総合的な教育が要求されていることは、「問題提起」のところで触れた。以前のように、文字を介しての接触がほとんどであった時代においては、ことばの役割の占める割合は高く、言語教育の果たす役割は高かつたであろう。しかし今日のように人と人、社会と社会とが交わり、それを通じて異なる文化と文化とが日常的に接触する時代においては、ことばの違いがもたらす問題以上に、むしろことば以外の、文化、社会、習慣の違いがもたらす問題のほうが、人や国の対立をもたらす危険性をも秘めており、解決が難しくなっている。したがって日本語教育においても、日本語それ自体を教えること以上に、日本の社会・文化・習慣を教える重要性が高まっている。

2. 認知言語学から見た言語

最近言語学の一分野としての「認知言語学」が最近注目を浴びているのも、一つには言語といったものを、文化という、外界に対する人間の様々な営みと一体不可分なものととらえているからであろう。すなわち認知言語学においては、「ことば」とは、単なる言語的知識だけでなく、その言語を使用する人が日常的に経験するところの様々な文化的な知識をその意味として取り込んでいると考えている。もちろん認知言語学は言語学の一分野であることから、言語の側から文化というものを見つめているものの、言語と文化とが一体不可分であり、文化への理解なしに言語というものを語ることは無意味であるという立場をとっている。

3. 国際日本学との連携による総合的日本語教育の可能性

このようなことから、今日、言語教育に文化教育を取り込むという形で、日本語教育のあり方が大きく変わりつつある、あるいは変わらなければならない時代を迎えていよいよいるといつていよいよいる。

これを「総合的日本語教育」ということばで表すとすれば、そのような総合的日本語教育を実現するために、何が必要であるかを検討する必要がある。本パネルディスカッションが計画されたゆえんはここにある。

「総合的日本語教育」という用語は、2000年11月に韓国・日本学会と日本の日本語教育学会との共催によりソウルで開催された、「日本語教育国際シンポジウム」のテーマ「21世紀型総合的日本語教育における語学・文学・文化及びメディアのあり方」に由来している。言いかえれば時代的要請から端を発したところの「総合的日本語教育」への歩みは、すでにこの時から始まっているのである。そしてこの動きは2002年11月に中国・天津で開催された「東亜日本語教育国際シンポジウム」へと引き継がれ、日本、韓国、中国、台湾、香港などの日本語教育関連学会のネットワークが構築され、調印されるに至っている。

このような動きの中で本企画は計画され、実現した。本企画が提示したかった結論は、以下の2点である。

第一に、日本語教育の壁を越えた日本学との「学際的な連携」が必要であること。

第二に、近隣諸国をはじめとした諸外国との間に「国際的な連携」が必要であること。

これから日本語教育の行くべき方向性がこのようなものであるとすれば、文字通り学際性と国際性を志向する「国際日本学専攻」に属する本学の日本語教育は、その先頭に立つべきであることはいうまでもない。

4. 近隣諸国と日本における総合的日本語教育の現状

4.1. 中国

日本語ブームが続いている中国でも、日本語教育の総合化（学際化）が進んでいる。13大学を対象に実施したアンケート調査に基づいた彭の報告「中国における総合的日本語教育の現状」によれば、「日本事情」や「日本文化」の科目的重要性が増し、多くの大学で開設されるに至っていることが報告されている。しかしそのプロセスにおいては問題も表面化している。第一に教材の媒介語や執筆陣など教材作成や科目のコースデザインの問題、第二に急速に進む日本学研究の成果が十分日本語教育に生かされていないという、日本語教育総合化に向けての学際性の問題である。それらは中国における日本語教育が、総合化をめざす上で越えなければならないハードルともなっている。

4.2. 韓国

韓国では日本語教育の総合化へ向けた試みがいくつかなされていることが、李の「韓国における総合的日本語教育と日本学の連携事情」によって紹介された。とりわけ日本学関連学会の連合による「韓国日本学連合会」の結成や、同徳女子大学校の日本語カリキュラム再編の試み、中学校に日本語教育が導入されるにあたって開発された日本語教科書『こんにちは』は、世界に先駆けて行われた総合化（学際化）のモデルとして注目に値する。さらに最近では韓国の中等教育における日本語教師会が連合会を結成する動きも見られている。またIT先進国としての韓国では3年前に全国の学校の教室がウェブサイトにより結ばれているが、こうした環境が学習者間のネットワーク構築や、日本語教育の国際化のための強力な基盤となっている点も見逃すことができまい。

4.3. 日本

日本語教育が総合化をめざしていることは、近隣諸国の日本語教育の現状だけでなく、日本で行われている日本語教員養成の教育内容からも読み取ることができる。佐々木の「日本語教員と文化リテラシー」では、2000年3月にまとめられた「日本語教育のための教員養成について」のシラバス分析を行った結果、「社会」「異文化」といった色彩が前面に出ており、明らかな文化志向が見られることが述べられている。

5. 文化に対する概念とその変遷

佐々木の「日本語教員と文化リテラシー」によれば、一言で「文化」といっても、そこには3通りの概念が存在することが述べられている。それは第一に「所産・知識としての文化」であり、第二に「相互作用に介在する文化」、第三に「個としての文化」である。そして時代の流れの中で、文化はその重視点を変え、「所産・知識としての文化」から、「相互作用に介在する文化」へ、さらには「個としての文化」を重視する方向へ移動しており、同時にそれは文化について「何を教えるか」から、学習者の文化体得を「どう支援していくか」へと、日本語教育の役割変化をもたらしているという。

6. 総合的日本語教育とは何か

では、このような役割の変化に対応するために、日本語教育が果たすべき役割は何であろうか。これは言いかえれば「総合的日本語教育」とは何かに対する答えでもある。

李は「韓国における総合的日本語教育と日本学の連携事情」の中で、言語の「総合的教育」の「総合性」には、3通りの意味があるとしている。第一に「言語4技能の総合化」であり、第二に統合教科的現場体験学習として展開される「認知的な総合化」、第三に関連領域を学際的に統合する「知的な総合化」である。このうち「総合的日本語教育」の構築に必要なのは、「認知的総合化」と「知的総合化」であると述べている。

「知的総合化」は、「文化」を取り込んだ日本語教育の横的拡大を促進する。その結果日本語教育をして学際化へと向かわせ、日本学との連携を不可欠なものとする。

一方「認知的総合化」は、取り込むべき「文化」の内容を、「所産・知識としての文化」から、「相互作用に介在す

る文化」へ、さらには「個としての文化」へと、その重視点を移動せしめることに役立つであろう。このために日本語教育は、実質的な国際間の交流、すなわち国際化を要求する。国際化には、日本と近隣諸国の実質的なネットワークもさることながら、インターネットなどを活用したネットワークの構築も、ユビキタスで日常的な国際交流の実現に一役買うことになる。

7. まとめ：日本語教育がめざすべきこと

以上のような考察から見えてきたことは、日本語教育がめざす総合性とは、学際化をめざす「横的な発展」と、国際化を基盤として「所産・知識としての文化」から、「相互作用に介在する文化」、さらには「個としての文化」を志向する「縦的な発展」を支援するものでなければならない。そしてそのために必要なのが「認知的総合化」と「知的総合化」であろう。今日の日本語教育がめざすべき「総合的日本語教育」とは、まさにこのようなものであるといえるだろう。

図1 総合的日本語教育をめざすべき方向性と実現への方策

